研究ノート

スピーチ場面の否定的感情に対する話者の社交不安の影響

―原因の認知を媒介とした検討―

吉　澤　英　里

星槎道都大学研究紀要

第 4 号

2023 年

The Bulletin of Seisa Dohto University
No.4, 109－115, 2023

研究ノート

スピーチ場面の否定的感情に対する話者の社交不安の影響

―原因の認知を媒介とした検討―[1)]

吉　澤　英　里

要約

本研究では，スピーチ場面で喚起される否定的感情に影響を与える要因を検討するため，社交不安と原因の認知に注目した。先行研究から，社交不安の高い人が低い人に比べてスピーチ場面で否定的感情を抱きやすいのは，他者への意識が高いからだということが示されていた。そこで，これ以外の原因について探索的に検討した。結果から，高社交不安者は失敗不安，性格（恥ずかしがり屋など）および他者への意識をより高く評価する傾向を有していた。加えて，そうした評価が否定的感情の高さに影響していることが示唆された。

1　はじめに

発表，プレゼンテーション，あるいは自己紹介のように，私たちは日常の様々な場面で人前での発言を求められる。そして，そのような状況下で不安や恥，恐怖といった否定的感情を経験することがある。否定的感情の強さは話者によって異なるが，この個人差は何によるものなのか。本研究では，複数の聴衆の前で行われる潜在的あるいは顕在的な他者評価を伴った一方向の発話をスピーチとする。そして，スピーチ場面での否定的感情に影響を与えると予測される複数の認知的要因を扱い，要因間の関連について検討する。

スピーチ場面での話者の否定的感情を扱う際，パーソナリティからの影響を無視できない。代表的なパーソナリティ要因として社交不安（social anxiety）[2)] がある。社交不安は「現実の，あるいは想像上の対人場面において，他者からの評価に直面したり，もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」（Leary, 1983，生和訳 1990，p. 4）と定義される。先行研究において，高い社交不安を示す話者は低い話者よりもスピーチ場面での否定的感情が強いと報告されている。例えば，スピーチ課題を行った Yoon & Quartana（2012）では，高い社交不安を示す話者の主観的不安感が低い話者よりも強かった。また，高い社交不安を示す話者は実際のスピーチ場面だけでなく，スピーチをイメージした状況でも否定的感情が強く喚起されるとの報告もある（小泉，1997）。社交不安の定義には「他者評価」が含まれており，実際に否定的評価への恐れ（Fear of Negative Evaluation；FNE）は社交不安の中核的な認知的概念として知られている（Rapee & Heimberg, 1997）。

FNE とは，他者から否定的に評価されることへの悩みに加えて，他者から否定的に評価されるだろうという予測でもある（Watson & Feiend, 1969）。FNE の高い話者と低い話者の 2 群を対象に，安静時，スピーチ予期時，スピーチ課題時の不安と注意の方向性を測定して比較した河﨑・髙島・岩永（2009）では，FNE の高い話者は不安がより強く，スピーチ課題時に「評価者の反応が気になる」といった他者情報へより注意を向ける傾向があった。また，他者への意識と否定的感情との関連について，スピーチ課題時の他者評価の予告の有無を操作した結果，予告あり条件では予告なし条件に比べて他者への意識が高く，スピーチ課題前後の否定的感情が強かったという報告もある（竹端・中野・久住，2020）。よって，高社交不安の話者は他者を意識するためにスピーチ場面でより強い否定的感情を経験し，それは他者からの否定的評価を強く恐れるという特性によると考えられる。

このように，話者のパーソナリティである社交不安がスピーチ場面の否定的感情を高めるように作用するのはスピーチ場面が他者から評価を受ける状況であり，話者がそれを認知するからだと考えられる。では，スピーチ場面で高社交不安者の否定的感情が強いのは，他者の存在を強く意識するためだけなのか。この疑問を明らかにすべく，本研究では他者への意識以外の要因を探る。

Proctor，Douglas，Garena-Izquierdo，& Wartman（1994）は 19 名の学生にスピーチに対する不安の原因を尋ね，4 つ（評価と批判，ミスや失敗，注意と孤立，見知らぬ聴衆）を見出した。さらに，Bippus & Daly（1999）は 192 名の大学生を対象に調査を行い，9 つの原因（恥，準備，身体的魅力，厳格な規範，性格特性，観客の興味，新奇性，失敗，否定的結果）を見出した。このうち，最

も得点が高い，つまり原因の可能性として最も高いと評価されたのは失敗（e.g.，何を言っているのか分からなくなることへの不安）であった。このように，他者の存在意外の原因によっても私たちの否定的感情は高まることが示唆されている。ただし，Bippus & Daly（1999）は調査協力者に対して，各質問項目の内容がスピーチ場面での不安の原因としてどれくらいあてはまりうるかという「可能性」を回答させている。つまり，この調査は一般的なイメージを扱ったものであり，特定の場面を想起させるといった個別の経験に基づくものではない。

Bippus & Daly（1999）を引用し「あがり」の原因を調べた先行研究として有光（2001）がある。有光（2005）によると，「あがり」は日常語であり多義的であるため操作的定義が難しいものの，「当落や社会的評価など自分自身に否定的評価を受ける場面で，他者を意識し，責任感を感じ，自己不全感，身体的不全感，生理的反応や震えを経験することであり，状況によって他者への意識や責任感の程度が変化すること（有光，2005，p. 17）」と定義される。有光（2001）は大学生に「あがり」の経験を想起させ，その原因をたずねた。そして，「あがり」の原因を「失敗不安」「責任感」「性格・感情」「不足感」「他者への意識」「新奇性」「劣等感」に分け，Bippus & Daly（1999）の身体的魅力を除く 8 つの因子とそれぞれ対応していると考察した。さらに，スピーチに相当する社会的評価場面における「あがり」の原因を測定した結果，最も影響があると評価されたのは新奇性であり，次いで，他者への意識，失敗不安，性格・感情だったと報告した。加えて，場面（個人の当落，異性，個人・非当落，社会的評価）間の比較において，失敗不安や性格・感情で場面間の差がない一方，社会的評価場面では他の場面に比べて，「あがり」の原因を責任感，他者への意識，新奇性に帰属する傾向にあることを示した（有光，2001）。つまり，スピーチ場面で話者が否定的感情を経験するのは，他者の存在を意識するからだけでなく，「失敗が許されない」と考えたり，「日頃経験しない状況だ」と感じたりするからだと推測される。しかし，この推測の根拠である「あがり」は状況の認知や生理的変化を含んだ概念である一方，本研究では感情のみに焦点を当てているため，有光（2001）の知見がそのまま適応できるのかはわからない。さらに有光（2001）には，パーソナリティの影響について言及していないという限界もある。

2　本研究の目的

社交不安はスピーチ場面での否定的感情に影響を与えることが明らかとなっており（Yoon & Quartana, 2012），高社交不安者の否定的感情が高い理由として，他者を意識することが示唆されている（河﨑他，2009；竹端他，2020）。本研究では，「スピーチ場面で高社交不安者の否定的感情が高い理由は，『他者を意識すること』だけなのか」という問いに対して，質問紙調査による検討を試みる。

先行研究では，他者への意識以外の原因が報告されていたが（Proctor et al., 1994; Bippus & Daly, 1999；有光，2001），社交不安が各原因とどのように関連するのかの検討は不十分だった。本研究では，社交不安の高さが否定的感情の原因の認知に影響し，その認知が否定的感情に影響するという仮説モデルを作る。ただし，有光（2001）より，7 つの原因間ではスピーチ場面の否定的感情への影響度合いに差があると予想される。そこで，まずはすべての原因を投入して仮説モデルの適合度を確かめる。そして，モデルの当てはまりが悪い場合には，適合度が最も良いモデルとなるよう，探索的な分析を行う。調査では，具体的なスピーチ場面を想起させ，そこで生じた否定的感情とその原因を回答させる。

3　方法

3-1　調査協力者と調査方法

2021 年 11 月から同年 12 月に Web 調査を実施した。調査者の所属機関の学生のみが閲覧できる Web 掲示板に調査依頼を掲示した。依頼文には，⑴スピーチ場面での経験を尋ねる学術調査であること，⑵データを学術目的以外には使用しないこと，⑶回答は任意・匿名で行われること，⑷回答データの送信をもって調査協力に同意したとみなすことをそれぞれ記載した。そして，調査用の URL を記載し，各自のデバイス（PC，スマートフォン，タブレット端末）からアクセスするように案内した。調査期間は掲示から 6 日間とした。さらに，Web 調査会社にモニタ登録をしている大学生にも同じ内容で Web 調査を実施した[3]。最終的に，大学生 260 名（男性 120 名，女性 135 名，その他 3 名，無回答 2 名，平均年齢 20.45 歳，$SD = 1.35$）から回答を得た。

倫理的配慮：本調査実施前に所属機関長へ研究計画書を提出し，調査対象者の人権や心身の安全を脅かしていないかについての確認を求め，調査実施の許可を文章で得た。

3-2　質問項目

社交不安：Mattick & Clarke（1998）によって作成された Social Interaction Anxiety Scale の日本語版を使用した（金井・笹川・陳・鈴木・嶋田・坂野，2004）。「対人交流に対する不安」と「対人交流場面における効力感の低さ」の 2 因子 20 項目で構成されている。「以下の文

章は，普段のあなたにどれくらいあてはまりますか。」と教示し，「1：全くあてはまらない」から「5：非常にあてはまる」の5件法で回答を求めた。本調査のデータに基づく信頼性係数は，「対人交流に対する不安」（$\omega = .93$）と「対人交流場面における効力感の低さ」（$\omega = .70$）だった。

スピーチの経験：「これまでに，人前で対面でのスピーチ（プレゼンテーションや発表を含む）をしたことがありますか？」と尋ね，3つの選択肢（1：はい，あります。2：いいえ，ありません。3：覚えていません。）から1つを選ぶように求めた。以降の設問は選択肢1（はい，あります。）と回答した者のみに表示され，選択肢2（いいえ，ありません。）または選択肢3（覚えていません。）と回答した者には以降の設問が表示されなかった。

スピーチの場面の想起：スピーチ場面を具体的に想起させる目的で，経験した状況を自由記述形式でたずねた。

否定的感情：一般感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴木，2000）のうち，「否定的感情」に該当する8項目を使用した。スピーチ場面の想起に続けて，「その時のあなたは，以下の文章で表現される気持ちをどれくらい感じましたか。」と教示し，「1：全く感じなかった」から「4：非常に感じた」の4件法で回答を求めた。本調査での信頼性係数（ω）は .87 だった。

原因の認知：否定的感情の原因に対する認知を測定するため，有光（2001）の「あがり」の原因の7因子（失敗不安，責任感，性格・感情，不足感，他者への意識，新奇性，劣等感）より，因子負荷量の高いものから各3項目（計21項目）を使用した。否定的感情の原因を尋ねる目的で，原典の「……こと」（e.g., 失敗することを考えること）という質問項目をすべて過去形かつ理由の表現（e.g., 失敗することを考えたから）に改めた。さらに，スピーチ場面に適していないと思われる2項目（「責任感」の「勝たなければいけないという気持ちがあったこと」および「劣等感」の「相手が好きだったこと」）は，因子負荷量の値が次に高い「失敗が許されないと思ったから」と「意表をつかれたから」にそれぞれ置き換えた。否定的感情への回答に続けて，「なぜ，そのような気持ちになったと思いますか？　その原因として，次の文章はどれくらいあてはまりますか。」と教示し，「1：全くあてはまらない」から「4：非常にあてはまる」の4件法で回答を求めた。本調査での信頼性係数（ω）は，「失敗不安」が .86，「責任感」が .68，「性格・感情」が .76，「不足感」が .82，「他者への意識」が .76，「新奇性」が .56，「劣等感」が .67 だった。

4　結果

調査協力者のうち，スピーチの経験が「ある」と回答した者は226名，「ない」と回答した者は14名，「覚えていない」と回答した者は20名であった。ただし，「ある」と回答した者のうち17名は，具体的場面の想起を求めた質問で「なし」や「思い出せない」といった記述をした。そこで，「ある」と回答し，かつ具体的場面を記述した者を分析対象とした。最後に，2つ以上の尺度で同一の選択肢を選んだ割合が90%を超えた7名を，回答の信頼性が疑われるために除外し，202名（全回答者の77.69%）のデータを最終的な分析対象とした。

各下位尺度に該当する質問項目への回答データから算術平均を求め，下位尺度の得点とした。各下位尺度の平均値と標準偏差，および下位尺度間の相関係数（Pearson）を Table 1 に示す。

仮説に基づき，「社交不安」と「原因の認知」を潜在変数，「否定的感情」を観測変数としてそれぞれ設定した。「社交不安」から2つの下位尺度（観測変数）へのパスを引き，「原因の認知」から7つの下位尺度へのパスを引いた。そして，「社交不安」から「原因の認知」と「否定的感情」へのパスを，「原因の認知」から「否定的感情」へのパスをそれぞれ引いた。この仮説モデルについて，社交不安，原因の認知および否定的感情の観測変数をすべて投入した共分散構造分析を実施した結果，モデルの適合度は不良だった（$\chi^2 = 149.72$，$df = 33$，$p < .001$，CFI = .87，RMSEA = .13）。そこで，原因の認知の下位尺度のうち，標準化解が小さい観測変数から順番に1つずつ削除した結果，Hooper, Coughlan, Mullen（2008）[4] に従い，適合度が良好だったものを最終的なモデル（$\chi^2 = 13.55$，$df = 7$，$p = .06$，CFI = .99，RMSEA = .07）に採用した（Table 2）。「原因の認知」からのパスとして「失敗不安」，「性格・感情」および「他者への意識」が残った（Figure 1）。

「社交不安」から「原因の認知」への標準化解（$\beta = .90$）は有意な正の値を示した。観測変数である「否定的感情」について，「原因の認知」からの標準化解（$\beta = .80$）も有意な正の値を示したが，「社交不安」から「否定的感情」への値（$\beta = -.00$）は有意でなかった。

5　考察

本研究では「スピーチ場面で高社交不安者の否定的感情が高い理由は他者を意識するためだけなのか」という問いを立て，スピーチ場面で生じる否定的感情について，社交不安と原因の認知による影響を検討した。先行研究を手がかりに仮説モデルを設定し，すべての変数を投入

Table 1　下位尺度ごとの記述統計と下位尺度間の相関係数（*r*）

下位尺度	*M*	*SD*	相関係数（*r*）								
			1	2	3	4	5	6	7	8	9
社交不安											
1. 不安[a]	3.06	0.89	—								
2. 効力感の低さ[b]	3.74	0.97	.37***	—							
原因の認知											
3. 失敗不安	2.93	0.83	.57***	.29***	—						
4. 責任感	2.37	0.75	.30***	.10	.51***	—					
5. 性格・感情	3.01	0.79	.59***	.41***	.63***	.31***	—				
6. 不足感	2.74	0.78	.25***	−.04	.44***	.21**	.33***	—			
7. 他者への意識	3.19	0.72	.51***	.31***	.59***	.28***	.65***	.38***	—		
8. 新奇性	2.86	0.60	.48***	.18*	.50***	.25***	.53***	.41***	.65***	—	
9. 劣等感	1.77	0.69	.39***	−.04	.45***	.48***	.31***	.38***	.29***	.38***	—
否定的感情	2.80	0.63	.58***	.30***	.55***	.41***	.67***	.42***	.66***	.62***	.40***

*$p<.05$，**$p<.01$，***$p<.001$
a)対人交流に対する不安
b)対人交流場面における効力感の低さ

Table 2　モデルの適合度指数と削除した観測変数（原因の認知）

	Model 1	Model 2	Model 3	Model 4	Model 5
χ^2	149.72	97.47	61.37	33.83	13.55
df	33	25	18	12	7
p	＜.001	＜.001	＜.001	＜.001	.06
CFI	.87	.91	.94	.97	.99
RMSEA	.13	.12	.11	.10	.07
AIC	3865.21	3447.99	3067.11	2634.04	2383.09
削除した変数	なし	責任感	責任感 劣等感	責任感 劣等感 不足感	責任感 劣等感 不足感 新奇性

した結果，適合度は悪かった。そこで，モデルの適合度を指標とした分析を探索的に行い，最終的なモデルを決めた。

まず，社交不安から否定的感情への直接効果は有意ではなく，原因の認知を媒介とした間接効果のみが認められた。先行研究（e.g., 小泉，1997；Yoon & Quartana, 2012）では社交不安が高いほど，スピーチ場面での否定的感情が高くなるということが示唆された。本研究でも相関係数は有意な正の値を示していたが，共分散構造分析では社交不安から否定的感情への直接パスが有意ではなかった。つまり，本研究のモデルを踏まえて考察すると，社交不安の高さはスピーチ場面の否定的感情に影響するものの，それは原因の認知を媒介とした間接効果によると考えられる。

次に，本研究の主目的である，スピーチ場面での原因の認知について考察する。社交不安から否定的感情への媒介変数として，失敗不安，性格・感情，他者への意識の３つが関わっていることが示唆された。本研究の分析結果から，社交不安が高い人ほど，失敗するのではないかと不安に思い，自分が恥ずかしがり屋であると考え，たくさんの人の視線を意識するといった認知をし，そして，それらを強く認知する人ほど否定的感情が強くなるという解釈ができる。

前述の通り，本研究の否定的感情と「あがり」の定義は違うため，単純な比較は困難である。しかし，有光（2001）において，社会的評価場面で顕著な原因として失敗不安，性格・感情，および他者への意識が挙げられていた点については，否定的感情を用いた本研究でも支持する結果となった。ただし，失敗不安と性格・感情の評価値はすべての場面（個人の当落，異性，個人・非当落，社会的評価）で高かった（有光，2001）ため，この２つはあらゆる場面に共通した「あがり」の原因であるとも考

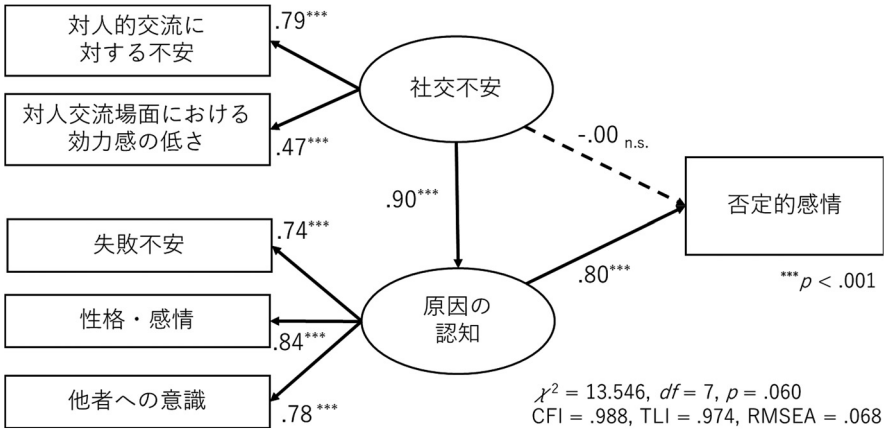

Figure 1　社交不安，原因の認知，スピーチ場面での否定的感情の関連（標準化解）
注：四角は観測変数，丸は潜在変数をそれぞれ表す。

えられる。

一方，有光（2001）では，社会的評価場面で顕著な原因として責任感や新奇性が指摘されていたが，この２変数は本研究の共分散構造分析の最終モデルに含まれなかった。結論に違いが生じた理由として，扱った従属変数（「あがり」と「否定的感情」）の違いのほかに，分析方法の違いが考えられる。有光（2001）では，下位尺度間の得点差への統計的検定は行われず，記述統計（平均値）に基づく比較が行われており，社会的評価場面の責任感の平均点が他場面よりも高いことが，考察の根拠となっていた。本研究において，否定的感情との相関係数に注目すれば，責任感（$r = .41$）も新奇性（$r = .62$）も否定的感情と相関があると言えるだろう。しかし，本研究では記述統計に基づく比較ではなく，共分散構造分析を行った。加えて，原因の認知の変数を投入する際，社交不安から否定的感情への媒介変数として扱った点も有光（2001）とは異なっている。観測変数間の相関係数から推測すると，責任感と新奇性は社交不安から原因の認知へのパスを形成する変数として不適切だった可能性が考えられる。あるいは，信頼性係数の低さ（$\omega = .56$，$.68$）が影響した可能性も指摘できる[5)]。

本研究を通して，話者のパーソナリティ（社交不安）によって状況の認知的評価が異なり，その捉え方の違いが情動経験の違いを生むという全体像の中で，スピーチ場面の否定的感情の生起メカニズムを説明したことは意義があると考える。ただし，想起に基づく調査研究だということを本研究の限界として挙げる。スピーチをイメージした状況でもより強い否定的感情が喚起されるという先行研究（小泉，1997）もあるため，この結果には一定の妥当性があると考えるが，実際のスピーチ場面でも同様の結果が得られるのかを検討すべきであろう。さらに，本研究では他場面との比較を行っていない点も課題として挙げられる。「異性」や「非当落・個人」などの異なる場面と比較することで，スピーチ場面の新たな特徴が発見されると思われる。

引用文献

有光興記（2001）.「あがり」のしろうと理論：「あがり」喚起状況と原因帰属の関係　社会心理学研究，17，1-11.

有光興記（2005）.「あがり」とその対処法　川島書店.

Bippus, A. M., & Daly, J. A. (1999). What do people think causes stage fright?: Naive attributions about the reasons for public speaking anxiety. *Communication Education*, 48, 63-72.

Bosch, J. A., De Geus, E. J., Carroll, D., Goedhart, A. D., Anane, L. A., van Zanten, J. J. V., Helmerhorst, E. V., & Edwards, K. M. (2009). A general enhancement of autonomic and cortisol responses during social evaluative threat. *Psychosomatic Medicine*, 71(8), 877-885.

Heimberg, R. G., Brozovich, F. A., & Rapee, R. M. (2010). A cognitive behavioral model of social anxiety disorder: Update and extension. In S. G. Hofmann, & P. M. Dibartolo (Eds.), *Social anxiety, second edition: Clinical, developmental, and social perspectives* (pp. 395-422). London: Elsevier.

Hofmann, S. G. (2005). Perception of control over anxiety mediates the relation between catastrophic thinking and social anxiety in social phobia. *Behavior Therapy*, 43, 885-895.

Hooper, D., Coughlan, J. & Mullen, M. R. (2008). Structural Equation Modelling: Guidelines for Determining Model Fit. *The Electronic Journal of Business Research Methods*, 6(1), 53-60.

金井嘉宏・笹川智子・陳　峻雯・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二（2004）．Social Phobia Scale と Social Interaction Anxiety Scale 日本語版の開発　心身医学，44，841-850.

河﨑千枝・髙島佳奈・岩永　誠（2009）．社会的場面とその予期における対人不安者の注意処理　行動療法研究，35，205-216.

小泉晋一（1997）．スピーチ場面イメージの鮮明度にイメージ能力とスピーチ不安が及ぼす効果　心理学研究，68，203-208.

Leary, M. R. (1983). *Understanding social anxiety: Social personality, and clinical perspective*. CA: Sage Publications.（リアリー，M. 生和秀敏（訳）（1990）．対人不安　北大路書房）.

松冨名奈子・杉森伸吉（2000）．特性不安およびスピーチの成功・失敗が社会的比較と原因帰属に及ぼす効果　性格心理学研究，8，126-127.

Mattick, R. P., & Clarke, J. C. (1998). Development and validation of measures of social phobia scrutiny fear and social interaction anxiety. *Behaviour Research and Therapy*, 36, 455-470.

小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人（2000）．一般感情尺度の作成　心理学研究，71，241-246.

Proctor, R. F., Douglas, A. T., Garera-Izquierdo, T., & Wartman, S. L. (1994). Approach, avoidance, and apprehension: Talking with high-CA students about getting help. *Communication Education*, *43*, 312-321.

Rapee, R. M., & Heimberg, R. G. (1997). A cognitive-behavioral model of anxiety in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, 35, 741-756.

竹端佑介・中野博子・久住　武（2020）．課題評価の予告が心理および自律神経反応に及ぼす影響　心身健康科学，*16*，1-14.

Tomaka, J., Blascovich, J., Kelsey, R., & Leitten, C. L. (1993). Subjective, physiological, and behavioral effects of threat and challenge appraisal. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 248-260.

Turner, S. M., & Beidel, D. C. (1989). Social phobia: Clinical syndrome, diagnosis, and comorbidity. *Clinical Psychology Review*, 9, 3-18.

Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 448-457.

Weeks, J. W., & Zoccola, P. M. (2015). "Having the heart to be evaluated": The differential effects of fears of positive and negative evaluation on emotional and cardiovascular responses to social threat. *Journal of Anxiety Disorders*, 36, 115-126.

Witt, P. L., Brown, K. C., Roberts, J. B., Weisel, J., Sawyer, C. R., & Behnke, R. R. (2006). Somatic anxiety patterns before, during, and after giving a public speech. *Southern Communication Journal*, 71, 87-100.

Yoon, K. L., & Quartana, P. J. (2012). Post-evaluative biases toward somatic stimuli and cardiovascular responses in social anxiety. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, 34, 451-457.

後注

1．本研究結果の一部は，日本感情心理学会第 30 回大会（2022）で発表された。

2．Tuener & Beidel（1989）が指摘するように，社会的状況で経験される不安は interpersonal anxiety, audience anxiety, speech anxiety, performance anxiety, stage fright, test anxiety, heterosocial anxiety, shyness を含む，様々なラベルの元で議論されているものの，社交不安という言葉が広く使われている。そこで，本研究では interpersonal anxiety をはじめとする用語もすべて社交不安と翻訳する。

3．回答者の重複を避けるため，Web 調査では調査対象の大学がある都道府県の居住者を除外した。

4．CFI は 0.95 以上，RMSEA は 0.07 以下を基準とした。

5．劣等感の信頼性係数が $\omega = .67$ であったことを踏まえると，そうだとは言い切れない。

Influence of Speakers' Social Anxiety on Their Negative Affect during Speech Situations:

Recognizing Causes as a Mediator

YOSHIZAWA Eri

Abstract

This study investigated factors influencing enhanced negative affect during public speaking by focusing on social anxiety and recognizing the causes of anxiety. Prior research has shown that people with high social anxiety have a high negative affect in speech situations than those with low social anxiety, possibly because of the high consciousness of others when speakers with high social anxiety. Therefore, this study exploratively examined other causes of their negative affect. The results of structural equation modeling showed that individuals with high social anxiety highly rated failure anxiety, personality factors, including I am shy, and consciousness of others. These cognitions influenced their high negative affect in speech situations.